

『三鈴の憂鬱』 作：A r i

放課後開始のチャイムが鳴ると同時に、クラスメイト達は教室を飛び出した。

若人よ、そんなに急いでどうする。と。彼らを見送りながら俺の心の中の老人が諭すようにつぶやく。

窓の外はまだほんのりと明るい春の夕暮れ。高校生の本分は勉強だとか言うけど、正直そんなものは三年になってから本気でやれば良いと思っている。今はまだ、遊びが本分！

……ん？ そうか、先週から俺三年になったんだっけ……。

思考回路が少々ぼやけているのは俺がバカだからではない。春だからでもない。俺の心をフヌケにしてしまうような大事件がつい先日この身に降りかかって、まだその衝撃から復帰できていないだけだ。

ちなみにフヌケとは漢字で『腑抜け』と書く訳だが、腑とは底力を入れる場所の事らしい。まあ確かに。そういうアツい何かがたぎる場所つうのが今の俺には欠落している気がする。

「あー……、コレ良いかも。乗りてえーっ……乗ってこのままどっか行っちまいてえ……」

机の上におもむろに取り出したるバイク雑誌。『月刊Y B野郎』5月号、特集ページの見開きを眺めながら俺はつぶやく。その声を聞きつけて、クラスメイトの篠田が「なに？ バイク？」と歩み寄って来た。

「んー。……ほら、これスゲくない？ 改造しまくってるしよお。マフラー超カッター」

同意を求めたが、篠田は髪を軽く搔くと口をへの字に曲げただけだった。

「そろそろ俺のもさ……新しいのに変えようかと思ってよォ。春だし」

さらに同意を求めんと、ちらりと篠田を見上げたが

「何で。三鈴バイク持ってっしょ。そんなに古くないし今ので良いじゃん」

理解不能、と書かれた顔がこちらを見下ろす。くそ、お前もチームの仲間のくせにマトモな事言ってんじゃねえよ。三年になっても金髪で押し通してる俺が余計バカに見えるじゃねえか。

俺は少し大げさに、ため息をつく。

そう、篠田にはきっと判らないだろう。俺達は同じ学校の『厄介者』だけど、コイツは俺より頭が良くて冷静だし、要領も顔も良いのだ。いや顔は関係ないか？ まあ良い。とにかく、だからチームの中でも信頼が厚くて、大抵ミツムネの一番側に居る。くやしき半分、尊敬半分。俺だって本当はそうありたい。ただ、ちょっといつもタイミングが悪いのだ。

ああ、思いだした。タイミング！ そう、カナの奴が最後に言ったのもそうだった。タイミング。二年も付き合っておいて、何を今さらタイミングだとか抜かしてやがんだ。

「……良くねえし。俺のバイク、タンデム用だもん」

脱力した上半身を机に預けて、俺は拗ねたように言う。ああ、伸ばした腕が重いのは買
い足したクロムハーツのせいだけじゃない。

「だから？」

「！！」

だから？ 今、だから？ って言ったのか、篠田よ。俺は思わず身を起こす。

「お前え！ 知ってるだろオ？ 俺、先週カナに振られたのっ！ 二年も付き合ってたの
に！」

「……あ、そうだっけ」

「そうだっけ、じゃねえっての！ ぬがあああああああ、今思い出してもマジ腹立つ！
よりもよって何で俺が西校のヤツに女取られなきやなんねえ訳っ！ くっそおおお
お！！」

しかも、しかもだ。この二年間のピリオドが『タイミングが悪かった』だぞ！？ くそ
っ！ 意味が判んねえ。タイミングって何だ。西校のヤツと出会っちゃったタイミング？
それとも俺と別れるタイミングってもんが最初からあったのか？ はっきりしねえ言葉で
終わらせやがって……！

漠然としすぎて当たりどころの無い気持ちを思い出し、俺は地団駄を踏む。ペタンコ
の上履きがさらに潰れそうな程に。

だけどそんな俺の気持ちとは正反対なほど冷静な声が振ってきて

「別にバイク、あれで良いんじゃないの？ まだ全然走ンだし」

そりゃそうだけどよ、篠田！ お前は判ってねえ……！

「だーからアレはもうイラネってのっ。だいたいカナのために買ってやったようなモンだ
し。……うしろ、ご丁寧にタンデム用の背もたれまでついてんの。お前も知ってるだろオ？」

そうだ。女に振られた揚句にあんなバイクに乗ってみろ。もう、いかにも「二人用だけ
ど乗せる相手いません！」的な事になるじゃねえか。

「あああああ、俺、そーゆーの、ヤなの。乗せる相手いないのに二人用とか何か寂しいじ
ゃん？ だからさ～……もう、次は一人用にする……」

あああああ買い換えてえ～！ バイクを変えて、俺のこの黒歴史をきれいさっぱり忘れ
てえ！

「バイト、あれから時給上がったのか？ 貯金は？」

「は？」

「バイク買うなら金が要るだろう」

「あー、えー……。おう、特に金は無えけど……」

正直、バイクを乗り換えたいという思いだけが先行して、まだそこまで考えていなかっ
た。

「効率悪いんじゃないか？」

「え、なに。コーリツ？」

ウチの学校は私立だけど？ いや、そんな話じゃねえよな、やっぱり。

「お前は彼女ができたって浮かれて二人用のバイク買ったようなヤツだぞ？ 今あの中古バイク売ったって、たいした金にはなんねえだろう。そこに貯金足して新車買ったって、どうせまた彼女が出来たら二人用のが欲しくなるに決まってる」

「いやあ、さすがに俺もその辺は学習するつつうか。次買う時はどっちでも乗れるようにさあ……」

「お前、それで満足な訳？」

「え？」

なに？ なんだ？ ンな真面目な顔で迫ってくるなよ篠田。

「カナと付き合い始めてすぐ、お前が買ってやった指輪。量販品じゃ嫌だつって、わざわざ店でオリジナルのを作らせたよな」

篠田の静かな声が、何故だか鬼気迫って聞こえる。俺は椅子に座ったまま半身をひるがえし、改めてヤツに向かい合った。……うん、怒っている訳ではなさそうだけど。

「よく……覚えてんな……」

ちなみに俺は言われるまで忘れていた。

「お前はそういう性格だろう？」

「え。どういう？」

「冬にバイク用の上着探しに行った時も、リバーシブルのジャケット見つけて。これはどうせ片面ばかり着るんだから、中途半端に両面用にして安物買うより、どっちかの色で、もっと本格的なのが欲しいとか言っただろうが」

「言っ……！ たっけ？」

おいおい、どこまで記憶してるんだお前の頭は。あまりの驚き具合にこのまま椅子ごとひっくり返りそうなんだが。

『男女兼用』だとか『年齢問わず』ってのより、お前いつも『本格』だとか『オリジナル』だとか、絶対そういう方選ぶじゃねえか。そんなお前が中途半端なバイクで我慢できる訳ねえだろう！」

「お・お前……よく見てんな……ハハハ」

「何年お前の事、見てきたと思ってんだ……」

「……………」

「……………」

「え？」

と、言葉になる前の短い息を吐いた瞬間に世界がぐると逆転した。

「うっわ！！」

いや、逆転したのは俺の体の方で。派手な音とともに椅子ごと無様にひっくり返ったのだ。誤解のないように付け加えるが、自ら転んだのではない。篠田のヤツが俺を椅子ごと

押し倒したのだ。

「ちょっ！！ な・何で乗っかってきてんのお前っ！！？」

「バイク、そのまま良いじゃん」

おいおい、言ってる台詞と状況が全く一致してないんですけど。ついでに言うとその真面目な顔で、何やってんのお前。……などとツッコミを入れる余裕がまだ、この時の俺にはあった訳だが。

「俺が後ろに、乗るから」

「なに？ お前も自分のバイク持ってんじゃない」

「お前の後ろに乗りてえって言ってんだよっ！」

「だから何でお前が乗るんだよっ！！」

この意味不明な攻防の末

「好きだからに決まってんだろっ！！」

の一言が怒声とともに耳に滑りこんできて、さすがに俺は固まった。

「……へっ……??」

やばい、声が裏返る。

夕暮れの生温かい風がカーテンを膨らませて、俺の上にまたがった篠田の黒髪を撫でていく。グラウンドから響く野球部の声、遠くで啼いた野鳥の声。のどかなあ……。

状況が読めなさすぎて一瞬、現実逃避。その間に恐らく篠田の中でも何らかの思いがあったのだろう

「好きだったら悪いか、くそっ」

絞るような声。

「な・なに？ ……好き？」

「……お前の背中にしがみついて、一緒に走りたいって言ってんだよ。……ココまで言っても判らねえか」

「い、いや……判る、けど。理解するのと歓迎するのは、ちょっと別っていうか……」

ちょっと冷静になれ、篠田よ。これじゃあ振られたばかりの俺の方が、まだ冷静ってモンじゃねえか。だいたいお前、こんな突っ走るキャラじゃねえだろうが。

「俺の事、嫌いか？」

そんな俺の気持ちを無視して、篠田が問う。ああ、やめてくれ。そんな辛そうな顔して聞かれたら、俺は何て答えれば良い？

「嫌いじゃねえけどっ。……ただのダチだと思ってっし……」

「カナだって、最初はただのダチだっただろう？」

「それはそうだけど……。まあ、カラダの相性が良かったっつーか、その……」

とりあえず視線を逸らして誤魔化す。男女の関係なんて、これとって決定的な何かがある訳じゃない。たぶん。

「なに？ 下世話な話？」

「いやまあそのっ、お・お前も男だったら判ンだろうがっ！」

「カナの体が良かったって言ってんの？ だからダチから恋人になった？」

「そこまでハッキリとは言わねえけど、ハハ」

やけにつっかかられて、腰が引ける。いや、正しくは腰を引こうとしたけど、この態勢では動けなかった。

「じゃ、体の相性で決めれば？」

そう言うと、まるで今から体育の授業が始まるかのような自然さで、篠田が突然制服を脱ぎ出した。

「ちょっ、お前っ！ なに脱いでんだっ！」

「試してみろよ。……気持ち良いか、どうか」

「篠……………ん、んむ……………」

抵抗の言葉を発しようとして口をあけたところへ、篠田の舌が滑り込んできた。昂っているであろう気持ちとは裏腹に、こいつの舌は少し冷たくて……うわ、何かヤバい。これはヤバい。ヤバいぞ。勢いに押し切られてペロチューしちまってる訳だけど、カナの時なんかと比べモンになんねーくらい気持ち良い。何だこれ。

「……ちょ、ちょっと……あ」

薄目を開けて見ると、篠田の顔が思った以上に近くにある。眉根を少し寄せて、苦悩したような表情。ああ、お前ってばこんな瞬間も男前な訳なのか。

柔らかい舌がゆっくり何度も俺に絡みついで、麻薬のように抵抗する気力を奪っていく。……いや、一応言っておくが麻薬なんてやった事はない。あくまで、想像だ。

「ほら、唇も。……柔らかいだろ？」

吸い付くような肉厚の唇。濡れたそれが確かめるように俺の唇とぶつかる。比べるのはフェアじゃないが、確かにカナのより柔らかくてなめらかだ。リップも口紅ものっかかってない、生の感触。そう思うとやけにエロい気分になっちまうんだけど……。

「どう、気持ち良い？」

「別に……………っ、普通だしっ。……まあ、男の唇が意外に柔らかかった事は認めっけど……………っ」

改めて聞かれると、当然素直にはなれない。この気持ちを悟られまいと意識したら、何か逆につっけんどんな答えになった。が、篠田の奴はたいして気にしていないようで。

「唇だけじゃ、ねーけど」

「え？」

「カラダもお前の事、気持ち良くできっから。……手、貸して」

ぬけぬけとそう言って、俺の手をとった。

「ちょっと、篠田っ！？」

「ほら、触って？」

はだけた白シャツの中に案内され、俺の指先がTシャツ越しに何かに当たった。

「……乳首立ってんの、判る？」

「わ、判る、けど……っ」

そうか、これが乳首か！！ って、俺は何を今更感動してんだ。いや、男の乳首なんて触った事ねえから、正直どう反応すりゃ良いのか判んねえ。おい篠田、切なそうな顔してねえで何か言ってくれ。

「三鈴の手、震えてる。ビビってんの？」

「！！」

困ったように少し笑った篠田の顔が、突然胸に突き刺さった。

俺の上で、俺にだけ微笑みかける篠田。規定シャツのボタンをはだけさせて、俺の手を導く篠田。男らしいけど甘いマスクの篠田。俺がひっそり憧れている篠田。一番大事な親友で、一番自慢の篠田。篠田。篠田。篠田。

「ビビってねえけどっ……ちょっと……これは……」

「なに？ ひいた？ まあ、普通ひくよな……放課後に学校でダチ押し倒して、自分の乳首触らせてんだから」

「いや、その……」

自虐めいた台詞をさえぎって、俺は告白する。気持ちより素直な体の反応は、もう隠せないと思った。

「お前にひく、つつ一か……」

「ああ……。三鈴の、勃ってんじゃん」

指摘されるまでもなく、完全に下半身が主張していた。

「なに。俺に迫られて勃起してる自分にひいてんの？」

「俺、ンな趣味ねえと思うんだけど……っ」

そうだ。自慢じゃないが、男の裸で勃起した経験など一度も無い。しかも今日の前にいる篠田は服すら脱いでいない訳で。……これは、つまりアレだ。キスのせいなんだ。カナと別れてしばらく、マトモにキスなんてしてなくて。所謂『溜まってた』というヤツで…

…

「無いかあるかは、試してから言えよ」

と、俺がせつかく体の良い言い訳を思いついたってのにコイツは何をやってんだ！！

「うわっ！！ お前、人のチャック開けんなっ！！」

カナにだって触らせた事のないズボンの小さなチャックを、篠田の長い指が器用にこじ開ける。

「ちょっ！ どこ触って……」

「ちょっと黙って」

「！ ……んっ！！！」

あ……あり得ねえ……！！

「お前……っ！！」

信じらんねえ……。篠田のヤツ、俺の勃起ちんこ舐めてんだけど……！

「……っはあ。結構デカいな、三鈴の」

上気した顔でこちらを見た篠田の唇が濡れている。

「……！！」

そのやけに艶っぽい口元と、埃っぽい教室というアンマッチさが俺に背徳心を抱かせたのか。下半身に血液が集まるのが、はっきりと判った。

「ああ……こんなに血管浮き出ちゃってさ。熱い」

微笑しながら篠田が俺を弄る。椅子ごとひっくり返ったままの蛙みたいに不安定な態勢だったけど、それでも俺は動けなかった。まさに、蛇に睨まれた蛙。いや、まな板の鯉？どっちでも良いけど、それやめろ篠田。あんま先端ばっか触ると出るからさ。

「あ、こんなトコにホクロある。可愛いね」

「わ……わざわざ説明すんな馬鹿……っ！」

恥ずかしいのと気持ち良いのとイケナイ事してるっていう興奮で、上げたままの両足が小さく震える。まじまじと俺の息子を鑑賞する篠田は、時折優しくキスをしたり舌を這わせてきて……

「も……っ！ マジやめろ……っ」

顔よりちんこが上にある、おかしい態勢。しかも握っているのは篠田で。

「っああっ！」

篠田は無言のまま、俺に見せつけるように舌でカリ首を刺激する。決して綺麗な形状とは言えない……むしろグロいそんな所を、いくら男同士だからって舐められるモンなのか。いや、むしろ男同士だからこそ舐められるとは思えない。コイツには抵抗ってモンが無いのか！？

「し、のだ……っ」

「ふふ。ごめん……。でも何かもう、コレ見てたら我慢できそうにない」

「な・なに……。んああああっ！」

悦楽に浸った表情で目を閉じると、篠田が喉の奥まで俺を含んだ。柔らかで温かな肉に包まれる感触に、一気に息が上がる。そのまま、ご丁寧に舌まで動かしてやがって……

「！！んっ……。ふうっ！」

敏感なところばかりピンポイントで攻められて、抵抗の言葉が出ない。あられもない声を上げそうになるのを、必死で耐えるのが精いっぱいだ。そんな俺をよそに、篠田が満足そうな顔でこちらを見下ろす。

「……なあ、もう、良いよな？」

「いつ……。良いって……。何が……。ああああっ！」

困惑する隙も与えずに、厚みのある舌が俺をなぞり上げる。

『入れても良いか』ってコト」

「入れ……。っ！？」

まさか、と俺は硬直する。『入れる』って、まさか。この状況で、入れる場所なんかひとつしか思い浮かばねえぞ！？ しかもそれは出口だろうが！！

貞操の危機を感じ、俺は起き上がろうともがくが、篠田はがっしりと俺の下半身に乗りかかっているビクともしない。

「くっそ！！ ま・待てって！ 篠田あっ！！」

「待てないって言ってんだろ……」

静かだが有無を言わさない口調。そうだ、コイツは言い出したら聞かない頑固な性格だった！

「篠田っ！！ マジ待てって！ ……俺、ンな準備できてねえしっ！！」

「はあ？」

俺の制止を軽くあしらいながら、篠田は自分のズボンを下ろしはじめる。制服の下から顔を出した篠田のそれを見た瞬間、俺の脳裏に背水の陣という言葉が浮かんだ。……ん？ 待てよ。この言葉は全力でぶつかれて意味だっけ？ いや、もう今はそんな事どうでもいい！！

「篠田っ……！」

懇願めいたうめき声に、篠田が真面目くさった顔を寄せてくる。

「黙って……お願いだから、じっとしてて」

「なに……んう……っ」

そのまま、優しいキスをされて。襲ってくるであろう尻の痛みを覚悟していた俺は、訳がわからず目を閉じた。

「……………ん……っ、ふ、ふ、ふうっ……っ！！」

え？

「し、篠田……？」

先端に当たるこの感触は、もしや。

「お、お前……っ、自分、の……？」

「はあっ、はあっ、はあっ……っ！！ ん、ふ……っ！」

狭い肉穴を押し広げて、篠田が俺を迎え入れるのがわかる。

「や……っ、ああ……っ」

思った以上に熱いのと、気持ち良いのとで、変な声が出てしまう。

「しのっ……篠田……っ、シメつけん、なっ……」

「締め付けてねえしっ。……お前のがデカイから入んねえのっ。んぐ……っ、んっ、んっ、はあっ！」

言いながら、篠田の腰がこちらの腹に沈んでいって。見上げると、ちょっと辛そうな顔が微笑んだ。そのままゆっくりと、やつが腰を動かす。

「あ、あ、あああああっ！！」

ぎゅうぎゅうに押し込まれた狭い洞内で、篠田の動きに合わせて俺が動く。まわりつ

いてくるような、引っ張られるような感覚。あまりの気持ち良さに、甘い声が出てしまう。

「ん……っ、あつ、篠田……っ」

思わず差し出した手をしっかりと握られる。彼が体を曲げて、俺の唇を吸った。こっちが犯してるはずなのに、何でお前の方が余裕なんだ？ そんな悪態もつけないくらい、俺は未知の感覚に酔いしれる。

親友？ 男同士？ ンなもんクソくらえ、だ。俺は快樂優先に生きてやる！ 今、そう決めた！

「三鈴……っ、三鈴っ……んんっ！」

いつもはクールなくせに、篠田はこんな時に限って切ない声を出してくる。卑怯者め、可愛いじゃねえか。それにしても……ああ、騎乗位ってエロいなあ……。

「っ！！」

余裕の態度をとっていたら、唐突に攻め込まれた。ヤバい、いや、ヤバくない、むしろ良すぎてヤバい！ ちょっと篠田、その場所は反則だろうが！！

「あっ！ や、やめ……っ篠っ！……あああっ！！」

「三鈴……っん、んっ、んっ」

「く……っ、はあ……っ、そこ、も・無理だって……っ！」

「む、無理とかっ……お前が決めん、なっ……っ、はあっ、はあっ、んんっ！」

「だっておま……っ、あ、あ……っ、スゲ、狭いトコ……んんっ！はあっ、はあっ、はあっ……」

「なに？ ……狭くて気持ち、良い？」

篠田が上から俺を攻めあげてくる。

「あっ、あっ……、やめっ！ 動くな、篠田あ……っ！」

俺は咄嗟にもう一方の手を突きだす。が、制止のつもりで出した手もあえなく捕まって、篠田はますます激しく腰を打ちつけてきた。

「んっ、んうっ、やだ……っ、お前の、欲しい、からっ……んっ、あっ、あっ、あっ！」

「し・篠田っ……はあっ、はあっ、はあっ……！！」

いや、挑発してる場合じゃないだろ！ 出ちまうだろうが馬鹿、ゴムも付けてねえのに何やってんだお前は！

「はあっ、はあっ、あっ、あっ、あっ、あんっ！ あんっ！ 三鈴、のっ、先っ、ぽ、あ、当たるっ！」

「ま、待て篠田……っ、ちょっ！」

「待たな、いっ！ あっ、あんっ！ 良いっ、デカイ、のっ、ゴリゴリ、してっ、あっ、あっ、はあっ！」

「お・お前っ！ 腰、振りすぎっ……あっ！」

くそ！ 正気を保つ余裕が……！

「馬……っ鹿！ やめ、あ、あ、あ……っ」

俺は必死に別の事を考える。ええと、こういう時は数学だ！ 何でも良いから公式を…
…と思ったけど俺、公式なんか覚えてるのねえし！ 九九で良いか、とりあえず……クロ
ク五十四！ って！！ 何で最初に九×六？！ フェラでもしたいのか俺は！！

「あ、あ、あぁっ！！」

違う、違うんだ篠田……っ！！ 俺は……俺は……

「三鈴だって、感じてるくせにっ、んんっ、はっ、はっ、はっ、はっ！」

「しの、だっ……くあああぁっ」

もう、耐えられない。篠田の動きだけじゃ足りなくなって、ついに俺は自らの腰を持ち
上げた。

「来て……っ、来いよ……っ。お前、中途半端は嫌いだろう？」

「篠田……っ」

「三鈴……っ、あっ、あっ！ はぁっ！ あっ、いきそっ！ っ、いいいいっ、良いいっ、
三鈴っ……良いいっ！」

「篠田っ、篠田っ、しのっ、あっ！ あっ！ あ、あああぁっ！！」

……………、なんてな。

「はぁ……」

俺は妄想を切り上げると、これみよがしに広げたバイク雑誌にもう一度目を落とす。特
集ページに掲載された改造バイクは確かに良い感じだったが、本気で手に入れたいシロモ
ノではない。

放課後の教室には、俺と篠田の二人きり。帰り仕度を進めている篠田の後姿をちらちら
と見ていたら

「ん？ 三鈴、バイク欲しいのか？」

ようやく視線に気づいたのか、篠田がこちらへやって来た。思わずぎこちない表情にな
る。

「い・いや～っ、俺も彼女と別れた訳だしっ？ そろそろバイクも変えようかな、なんつ
って！ ……ハハ！」

ハハ、ハハ、ハハ……………。くっそ！！ いきなり優しい顔して喋りかけんじゃねえよ！
危うく告白とかしちまう所だったじゃねえか！

カナと別れて一週間。俺はようやく悟ったのだ。そんなにあの子が好きじゃなかったっ
て事に。そして、そんな『どうしても良い女』に二年も時間を奪われた虚無感と、やっぱり
篠田が好きなんだという衝撃的な自覚は、大事件として俺の身に降りかかった。

まさに、どうしようもない気持ち。せめて親友としてこのままあと一年、過ごせると良
いけど……。

「これ、超カッコ良くね？ 俺のタンデム用だからさ、さすがに背中が寂しいっつか」

「ふーん」

ちらりと雑誌に視線を落とすと、篠田はいつもの真面目でクールな顔のまま言った。

「じゃ、俺を後ろに乗せれば？」

「へ！！！！？」

「お前の後ろ。空いてんだろ？」

俺は篠田を凝視する。なあ、篠田。お前の顔が少しだけ赤いのは、夕焼けのせいかな？

その時、学校のチャイムがウェディングベルのように、俺の頭の中で高らかに鳴った。

END